

## 『俳諧花の庵』

(小川家文書あー45より)

今回は小川家文書中に含まれる句集のうち、『俳諧花の庵』という写本の中の小川英二郎の句をいくつかご紹介しましょう。

この句集の「序文」にあたる部分には

春雨の徒なるより二三  
の俳子を語らひ虚実の  
平話に遊ハんと予ニ叫  
くハ春岡の雅君にして  
是よし武士の猛き心を  
和らけ陣中の鬱を  
散さんとの一趣向ならんと  
渡りに船の思ひをなし暫時  
公用の間を愉まん

と記されていて、この句集の成立の事情が語られていますが、年月日は全く記されていないので、どの戦さの時に詠まれたものかは直ちには判断しかねます。

本書は十六人の句で構成されていますが、主唱者は岡田春岡と矢部矢直という人物で、連句形式をとっています。矢直が発句を詠んでいるのがその証しでしょう。

この二人のほかに名を連ねているのは、辻一雫・飯田雪溪・榎本山遊・榎本柳原・高井有序・小出千笑・平松可明などが見えますが、最後に小川梅舟の名が記されています。

小川英二郎は国学者としては「能信」を名乗り、熊代繁里門下で『類題和歌清緒集』にその歌が収載されていますが、俳句に関しては誰に師事したかは定かではありません。ただ、小川家文書中の書簡には文芸関係のものとしては、後に「田辺六俳仙人」の一人に挙げられる田村風邨からのものが非常に多く、それらは時代的に見て英二郎の父富蔵（几鶯）にあてたものとしか考えられないのですが、彼はあるいはその関係で父から俳句を学んだ可能性があることも捨て切れません。

江戸期、特に幕末には武士・町人を問わず、和歌や俳句または狂歌などに秀でることがそれぞれの教養の高さを計る尺度とされていたようですので、人々はこぞってそれらの研鑽にいそしんだようでもあります。

それはさておき、本書には前句・後句を分割すると総計一四四句が収録されています。そのうち梅舟の句は一四句あり、矢部矢直と岡田春岡とほぼ同数です。十六人の最後に名が記されているということは、最初に登場する二人と小川梅舟の実力がほぼ同等と見なされていたことをあらわすのでしょうか。

この句集の場合、最初に登場する詠句にはきちんと名前が記されていますが、次句からは重なる名がない限り、一字しか記されていません。それが一般的であったのかは分かりませんが、「舟」と書かれているのが小川梅舟が詠んだ部分です。

連句の性格上、ここでは前句と後句を掲げなければ意味が通らなくなりますので、双方の句を読み下しました。

(文責：須山 高明)